漢詩を味わう

第142回

シャガ　（アヤメ科）

江南逢李亀年（こうなんにてりきねんにあう）　杜甫

岐王宅裏尋常見　岐王の宅裏（たくり）　尋常（じんじょう）に見（み）
崔九堂前幾度聞　崔九（さいきゅう）の堂前（どうぜん）　幾度（いくたび）か聞けり
正是江南好風景　正（まさ）に是（こ）れ江南の好風景
落花時節又逢君　落花の時節　又（また）　君に逢う

その昔、岐王さまのお屋敷ではいつもお目にかかっておりました。
また崔九さまのお屋敷の前庭でも何度かあなたの歌を聞いたことがあります。
今ここにあるのは、ほかならぬ江南の美しい自然。
それも落花の時節に、またあなたにお逢いするとは思ってもみなかったことです。

《江　南》通常は揚子江下流域南岸の水郷地帯をいうが、この詩では潭州（湖南省長沙県）のあたりを指していう。
《李亀年》玄宗の宮廷に仕えた名歌手。安禄山の乱のあと江南を放浪した。
《岐　王》玄宗の弟で、詩文の士を愛し、開元期の文化の中心的な存在だった。
《尋　常》常日頃。
《崔　九》九は排行で九番目を言い、一門の兄弟いとこを年の順に数えて九番目のこと。玄宗時代の中書令崔湜の弟で崔滌のこと。
《正　是》……にほかならない。

杜甫、五十九歳の詩です。安禄山の乱のあと、杜甫は家族と共に足掛け十二年間各地を遍歴し、潭州に滞在していました。洛陽出身の杜甫にとって江南は異国といえます。ここで催された宴会の席上で、玄宗に愛された往年の名歌手李亀年とめぐり逢います。杜甫の年譜によれば、十四歳の時に洛陽で父と一緒に李亀年の歌を初めて聴いていますが、その後何度も宮廷やサロンで顔を合わせています。かつて、李白が玄宗皇帝と楊貴妃の面前で詩を作り、これに合わせて李亀年がメロディを付けて歌い、楊貴妃はシルクロード経由で伝わってきたワインを飲みながらこれを聞いていたというエピソードがのこされています。
予期せぬ時に、昔の皇族貴族の屋敷とは異なり、都から遠い江南の地で、はらはらと花が舞い落ちる季節に、李亀年とめぐり逢ったのです。そして杜甫は、悪く言えばどさ廻りしている李亀年の現在の姿に、激しい社会の変動に耐え抜いて生きてきた自分の姿を重ね合わせます。
その複雑な心境を表には出さず、都で李亀年に会った当時を回想し、お互いに昔とはまったく違った状態で再会したという数奇なめぐり逢わせを淡々とうたっています。しかしこの詩には懐かしい思いの半面、感慨、そして寂寥感といったものが潜んでいます。「江南好風景」は江南の美しい自然を賛美しているのですが、杜甫にとっては異郷の地での春景色です。さらに「落花時節」という表現は、今は晩春だという季節の描写ですが、自分たちの人生の春もすでに終わり、そして唐王朝も安禄山の乱によって全盛期を過ぎたということを暗に含んでいるようです。
杜甫は若かりし頃、天下を救うという理想に燃えながらも科挙に通ることが出来ず、漸く四十半ばで官途についたものの、安禄山の乱に翻弄されて放浪の生活を送る一生でした。この詩を詠んだ年の暮れに杜甫は亡くなっています。

参考文献：杜甫詩選（岩波文庫）・中国詩人選集杜甫（岩波書店）・唐詩鑑賞辞典（東京堂出版）・杜甫「偉大なる憂鬱」（平凡社）

小苑鶯歌歇み　長門蝶の舞うこと多し　眼のあたり看る　春の又去さるを　翠輦曾て過ぎらず

《大意》小苑に鶯の歌う声は止み、長門宮に蝶はむらがり舞う。目の前にむなしく、今年も春はまた過ぎ行くが、みかどの車はまだ一度も、ここを訪れ給うたことはない。（令狐楚詩「思君恩」）

水を掬えば月は手に在り　花を弄れば香りは衣に満つ

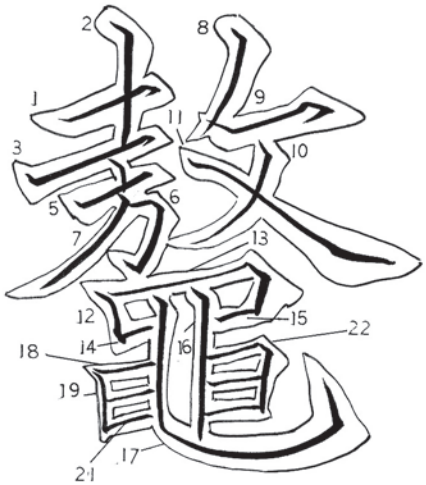
《大意》水を両手ですくえば、月は手の中に入ってしまう。花を折って手にとれば、花の香りは衣服にいっぱい染み込む（于良史「春山夜月」）

読み　鰲身（ごうしん）天に映じて黒く（波間に大ウミガメの甲羅が大空を背景に黒々と見え）

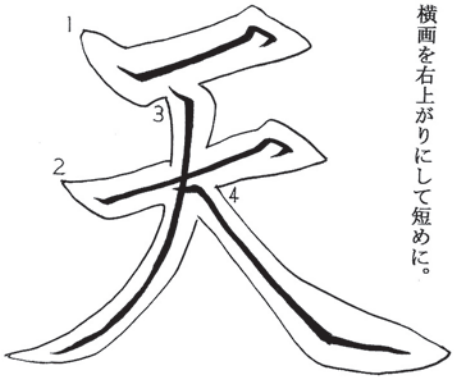
佐藤象雲書

一般部規定課題出品について

・規定課題は段級の区別なく、前頁掲載の五言句となります。
・初段以下の方に限り、前半二文字または後半三文字でも構いません。
・規定課題（楷書）の出品はひとり一点に限ります。

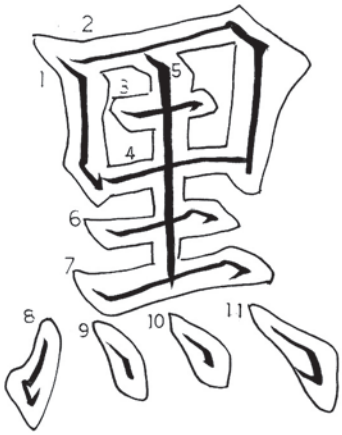


鰲は異体字。繁画なうえにバランスの取り難い結体。筆先を利かせて細やかな運筆を心がけたい。

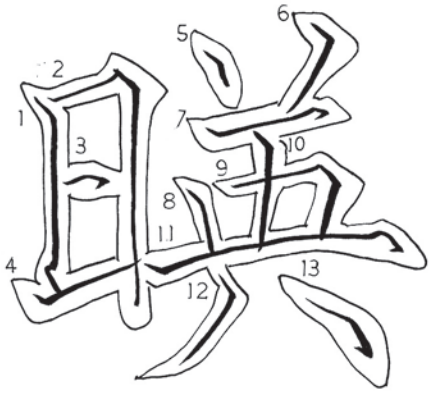


横画を右上がりにして短めに。

左右縦画をやや背勢にして颯爽と。



第七画は短めに。烈火は上辺を揃え、角度や強さに変化を付ける。



映の書写体。旁の下部は二点とせず中央縦画を通し左払いにする場合は筆順が異なる。

「異体字」とは標準字体と異なるが、意味や発音が同じで通用している字体。
「書写体」は毛筆の手書き文字として伝統的に使われていた楷書で、「正字」とも言われる。書道作品としては書写体の使用が好ましい。
「天」は活字体では上の横画が長いが、正字は下の横画を長くしている。

連月課題

王維詩「送秘書官晁監日本国」

積水不可極
積水極む可からず

安知滄海東
安んぞ滄海の東を知らん

九州何處遠
九州何れの処か遠き

萬里若乘空
萬里 空に乗ずるが若し

向國惟看日
国に向って惟だ日を看る

歸帆但信風
帰帆 但だ風に信す

鰲身映天黑
鰲身 天に映じて黒く

魚眼射波紅
魚眼 波を射て紅なり

鄉樹扶桑外
鄉樹 扶桑の外

主人孤島中
主人 孤島の中

別離方異域
別離 方異域なりて

音信若爲通
音信 若為か通ぜん

行　書

※成家・師範の随意作品出品は二点までです。

草　書

◇各体とも書風は自由です。特に上位者は古典などを参考に創意溢れる作品をご出品ください。

隷　書

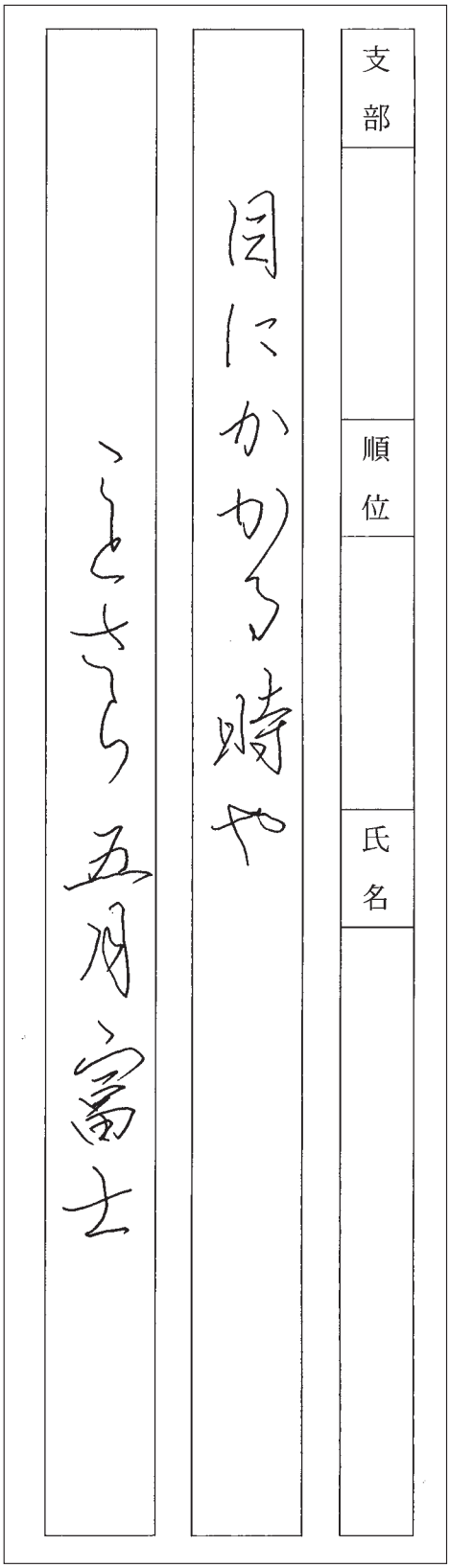
次号課題

魚眼　波を射て紅なり

ペン字部課題　（5月31日〆切）

細字部課題　（5月31日〆切）

（両部とも本会所定の指定用紙を使用のこと）



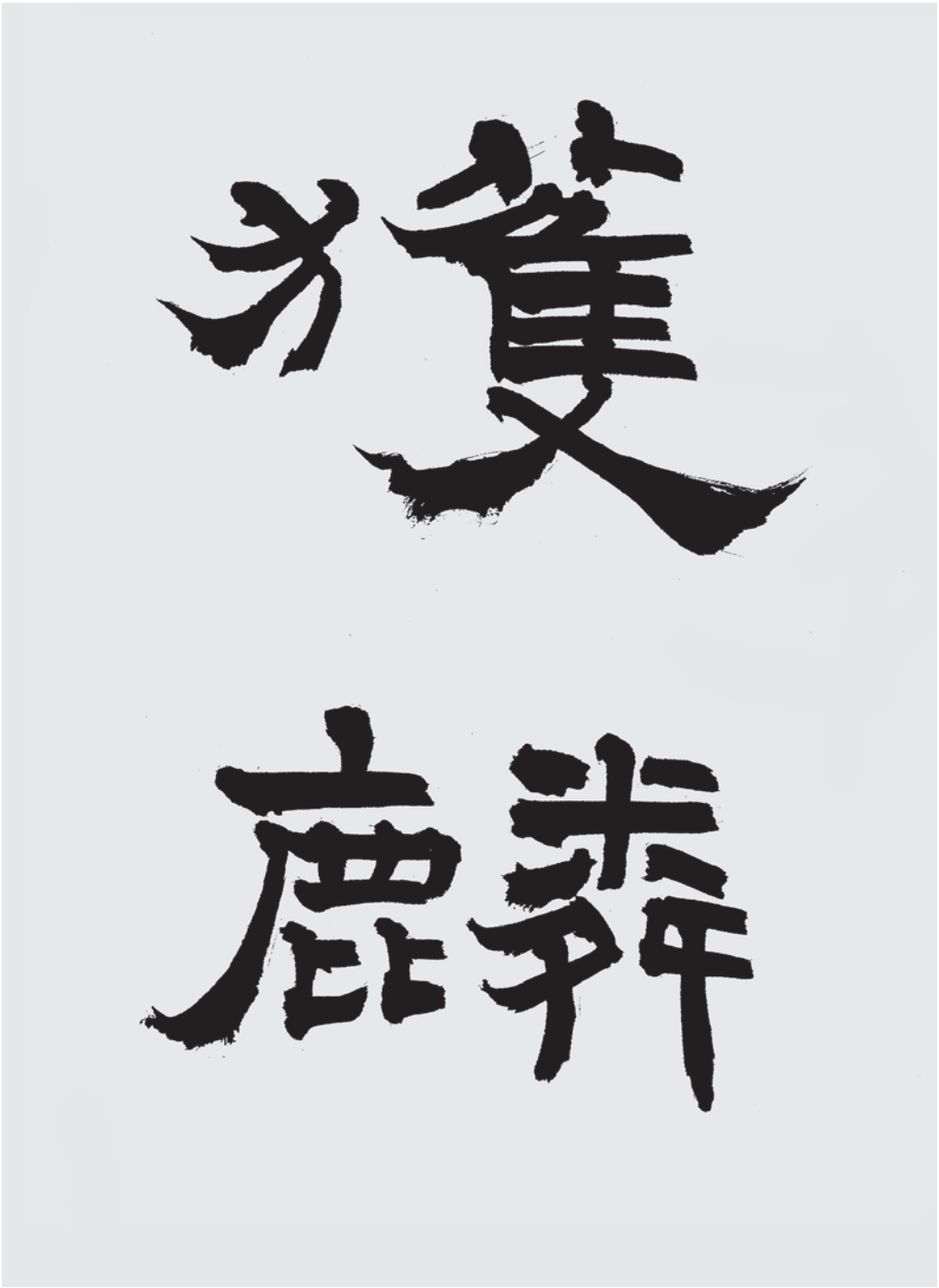
芭蕉

和泉溪石先生書

佐藤象雲書

音　ショクサイナンポ　ガゲイショショク

略解　俶ははじめて。はじめて日当たりのよい南向きのたんぼに耕作し自分はキビやアワなどの穀物をまき植えて、農業に励み怠らず



麟を獲る

象雲臨

■禮器碑（後漢・西暦一五六年）の臨書 (24)

『獲麟』

今月は「獲麟」の二文字ですが、いくつかの拓本の影印本（印刷物）を比較しても、鮮明なものは見当たりません。

この禮器碑は山東省曲阜の孔子廟に現存していますが、現在おもに習われている拓本は明末から清初にかけて採られたものです。拓本は古いほど、碑の磨滅が少なく良い状態のときに採られているわけですが、禮器碑は佳拓が少なく鮮明度に欠ける嫌いがあります。一方で、建てられた当初の文字の状態を想像しながら再現を試みることも有益な勉強法で、類似する他字から推測したり、同時代の八分隷を参考に字を探って書いたりしても良いわけです。

今月の二文字を見てみます。「獲」の獣偏は本碑にある獨を参考にすると同様に小さめで、旁に対して幾分上方に位置していて、また旁と十分に離して余裕を持たせています。

「麟」は線が不鮮明ながら、偏旁ともに画数が偏十一画、旁十二画とほぼ同じで、文字面積を二分していて、力関係もほぼ対等であることが判ります。また旁の下部は、左右相対していて篆書の趣を残しています。

陰を明らかにし、陽を洞けば……

象雲臨

■王羲之・集字聖教序（唐・西暦六七二年）の臨書 (9)

『明陰洞陽』

北宋時代の徽宗の宣和年間（一一一九－一一二五）に編纂された宣和書譜には、「羲之の書を模倣するには必ず懐仁より始めるなり、豈に羲之の絶塵の処、窺測して形容す可からざんや。」とあります。「王羲之の書を学ぶためには、懐仁によって作られた集字聖教序から学ぶことが大切。まさに王羲之の世俗からかけ離れた真骨頂、勝手に集字だからと推測するべきではない。」といったような意味合いでしょうか。完成から四百年以上経過してもなお高く評価されていることが分かります。しかし、石に刻された集字碑ということで、筆触や線の連続性は欠如しています。形似を目的とせずに、線の脈絡を大切にして連続的な運筆を心がけてください。

今月の語句のように「陰を明らかにし、陽を洞く（隠れたものを明らかにし、あらわれているものから洞察する）」という意識が大切です。